運動疫学ニュースレター

日本運動疫学会
Japanese Association of Exercise Epidemiology

令和 4 年 12 月 15 日発行 No.18

第 24 回日本運動疫学会学術総会のご報告

第 24 回学術総会大会長／東海大学　久保田 晃生

2022 年 6 月 25 日（土）、26 日（日）の 2 日間、東海大学湘南キャンパス 19 号館を会場に、第 24 回日本運動疫学会学術総会を開催いたしました。学術総会開催にあたり、実行委員会を組織し、副大会長に東海大学の萩裕美子先生、実行委員長に東海大学の松下宗洋先生、委員として東海大学の野坂俊弥先生、慶應義塾大学の小熊祐子先生、日本体育大学の齋藤義信先生にご尽力をいただきました。また、準備、当日の運営は、東海大学の博士課程に在籍する岡本尚己さん、稲益大悟さん、慶應義塾大学の博士課程に在籍する平田昂大さん、明治安田健康開発財団の河原賢二さん、東海大学の学生、院生、関係者の方にもご協力をいただきました。

さて、第 24 回学術総会は 3 年ぶりに完全対面開催へ舵を切りましたが 2 日間で 138 名の方に会場へ足を運んでいただきました。学術総会のテーマは「スポーツの価値の再考」とし、主に 1 日目の基調講演 1 ・ 2、教育講演で議論を進めました。基調講演 1 では東海大学の高野進先生に「スポーツの価値の再考」についてご講演をいただきました。高野先生ご自身が、選手、コーチとして、オリンピックを経験され、多世代に対して走ることを普及する取り組みを熱心に行われていることが感じとれました。基調講演 2 では東海大学の萩裕美子先生に「スポーツの価値の再考～運動疫学会に期待されるもの～」についてご講演をいただきました。萩先生からは、スポーツ基本計画の策定における目標設定のベースとなる研究成果が限られている現状とスポーツ疫学研究の必要性をお話しいただきました。教育講演では早稲田大学の澤田亨先生に「スポーツの価値とスポーツ疫学研究」についてご講演をいただきました。澤田先生からは、「する」スポーツに加えて「みる」や「ささえる」スポーツも健康や幸福に貢献する可能性があることと、実際に取り組んでいるスポーツ疫学研究のお話しをいただきました。1 日目には、この他にプロジェクト研究報告が 6 演題、口頭発表 1 （審査研究発表）が 4 演題、ポスター発表が 17 演題ありました。

2 日目には、口頭発表 2 で 7 演題の発表がありました。また、3 つのシンポジウム（「既存データの運動疫学への活用」「COVID-19 の拡大環境下における身体活動・運動のすすめとその理解」「アクティブガイド改定」）も開催いたしました。休憩中にもいたる場所で研究の情報交換が行われている様子を確認しましたが、大変懐かしく喜ばしい光景でした。

最後になりますが、運動疫学を全く理解していない状態で 2004 年に本学会のセミナーに初参加してから 18 年が経ちました。当時は健康運動指導士として現場で働いておりましたが、しつこく本学会に参加し活動してきた結果、多くの皆様の支えのもとに、第 24 回学術総会を大会長として開催させていただけたことは、大変感慨深いものがあります。この場を借りて、運動疫学を通じてお知り合いになりました同志の皆様に改めて御礼申し上げます。

CONTENTS

1. 第 24 回日本運動疫学会学術総会のご報告 …1
2. 第 25 回日本運動疫学会学術総会のご案内 …2
3. 私と運動疫学 ……2
4. ホームページリニューアルのお知らせ …2
5. 第 7 回運動と健康：分野横断型勉強会のご報告 …3
6. 第 77 回日本体力医学大会：シンポジウム開催のご報告 …3
7. 会員による海外情報 ……4
8.「日本運動疫学会プロジェクト研究」報告 …4

第 25 回日本運動疫学会学術総会のご案内

第 25 回学術総会大会長／中京大学　重松 良祐

第 25 回日本運動疫学会学術総会を中京大学名古屋キャンパスで開催します。会期は 2023 年 6 月 24 日(土)と 25 日（日）です。大会長を中京大学スポーツ科学部の重松良祐が務めさせていただきます。本総会のテーマを「普及と継続」に設定しました。この数年間の出来事として、東京五輪が終わり、新型コロナウイルス感染症が蔓延し、日本を取り巻く国際情勢が大きく変わってきています。しかし、その中でも身体活動・運動の普及は継続していかなければなりません。本総会では普及や継続に関連する研究知見を学会の皆さまと見つめ直し、これからの研究活動のお役に立つことを願っております。

講演やシンポジウムについては現在企画しているところですが、中高齢者を対象に普及されている研究者のお話に加え、学校現場でのアプローチや、アスリートへの継続支援、海外への普及活動といった内容も含めたいと考えております。第 24 回と同様、現地開催を予定しております。名古屋にぜひお越しくださいますようお願い申し上げます。

私と運動疫学

中京大学　重松 良祐

私が運動疫学に接したのは、博士課程の時でした。高齢者向けダンスプログラムを作成し、その効果検証を終えた後、これを普及しようとした時です。当時は普及方法が分からなかったので、運動していない高齢者のニーズを三重県志摩市で調査しました。その結果、「みんなで楽しくできるプログラム」を欲していることが分かったので、その知見を生かしてスクエアステップを作成しました。そしてスクエアステップを普及していく中で、保健事業等を評価する枠組み RE―AIM に出会い、また国内の仲間とともに PAIREM を発表するに至りました。

普及活動に並行し、海外での運動疫学がどのように進んでいるのかを知りたく、フィンランドとアメリカに半年間、行きました。フィンランドではユヴァスキュラ大学のハイキネン教授とランタネン教授のもとでコホートのデータベース構築とその活用方法を学びました。また、東京医科大学の井上茂先生に仲介いただき、サンディエゴ州立大学のサリス教授のもとで、環境と身体活動に関わるデータを電話で収集している様子を見ることができました。華々しい論文発表のもとには、地道な取り組みがあることを学びました。こうした経験は、スクエアステップを海外に普及させるときの参考になっています。

2020 年度まで勤務していた三重大学での 19 年間は、津市や鈴鹿市などの自治体で介入研究や通いの場づくりを手がけてきました。その後、中京大学に異動しました。現在、中京大学や豊田市と協議し、地域貢献プロジェクトや介護予防事業にどのように参入していけるかを探っているところです。

教育・研究する場所は変わっても、一貫しているのは運動疫学的なまなざしです。私にとっての運動疫学は、人が元気に運動できる仕組みを作り・普及を考えるプラットフォームです。今後も運動疫学に邁進します。

日本運動疫学会ホームページリニューアルのお知らせ

広報委員会委員長／日本大学　難波 秀行

現在、広報委員会では学会ホームページ (HP) のリニューアルに取り組んでいます。背景には、現行の HP はスマホ画面で見にくいことや、情報が増えてきて整理する必要があったことなどが挙げられます。また、近年 SNS による情報発信が一般化してきており、学会 HP と連動させることにより、アクティブに、インタラクティブに学会員の交流、学会外への情報発信が期待できます。HP 改定作業を通じて、1998 年 9 月に発足した運動疫学研究会、2013 年 10 月に発足した日本運動疫学会の設立趣意書に触れ、研究会発足から来年で四半世紀が経過しますが、設立当初の熱い想いを新たな HP にも込めて参りたいと思います。近日中には公開予定です。乞うご期待ください。

第 7 回運動と健康：分野横断型勉強会の開催報告

学術委員会委員／帝京大学　桑原 恵介、天笠 志保

2022 年 9 月 20 日に「第 7 回運動と健康：分野横断型勉強会」が Web 開催されました。今回はコロナ下で急速に普及が進んだオンラインツールに着目し、介入研究への応用可能性を探るために、6 名の専門家に実例を交えながらお話しいただきました。

最初に、オンライン研究の基本的な流れについて、中田由夫先生（筑波大学）から概観いただいた後、アプリやオンライン指導といった介入方法の事例、対象集団ごとの具体的な研究方法について 5 名の先生にお話しいただきました。難波秀行先生（日本大学）には Web ベースの身体活動評価システムやウェアラブルデバイスを用いた最新の研究や取り組みをご紹介いただきました。小谷究先生（流通経済大学）には筋トレやバスケットボールのオンライン指導を例に、オンラインを活用した部活動や授業の実際、工夫点、注意点などをお話しいただきました。鈴木宏哉先生（順天堂大学）・宮田洋之先生（中京大学）には幼児を対象としたオンライン運動指導の事例をご紹介いただき、効果的に実践するための機材環境および指導環境の整備、保育関係者との連携等について共有いただきました。渡邊裕也先生（明治安田厚生事業団体力医学研究所）には高齢者向けオンライン運動教室の実績や問題点、運用可能性などについてお話しいただきました。

当日は 87 名の参加があり、Web 開催の利点を生かして匿名で質問や感想についてコメントできる Web サービスを活用したところ、多くのコメントをいただきました。また、勉強会終了後に小谷先生のご厚意で、メタバース上での意見交換会を開催しました。次年度も勉強会を開催することを計画しておりますので、運動や健康にご関心のある方々をお誘いの上、ぜひご参加ください。

最後に、開催にあたり、日本運動疫学会事務局の皆様には企画立案の段階から多大なご尽力いただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。

第 77 回日本体力医学会大会：シンポジウム開催のご報告

学術委員会委員／九州大学　本田 貴紀

学術委員会では、運動疫学研究の成果をミクロ系の体力医学会会員に発信・相互作用し、連携・相互発展を図ることを目指した企画を行っています。その一環として、第 77 回日本体力医学会大会（令和 4 年 9 月 21 ～ 23 日、オンライン開催）において、学術委員会企画シンポジウム「疫学・フィールド研究で活用可能な筋マーカーを探る：教えて！ 使っている人！」を開催しました。

本シンポジウムでは、基礎研究から疫学・フィールド研究への橋渡しを目標に、川上諒子先生（神奈川県立がんセンター [現 明治安田厚生事業団体力医学研究所]）、上村一貴先生（大阪公立大学）、山田陽介先生（医薬基盤・健康・栄養研究所）にご登壇いただき、筋の質や量を測るマーカーのなかでも近年注目度の高い指標として、下腿周囲長、生体電気インピーダンス法による phase angle（位相角）、細胞内液・外液量について解説いただきました。座長の大須賀洋祐先生（東京都健康長寿医療センター研究所）を交えて、筋マーカーの意義や、スクリーニング手法の実際、フィールド調査での適用可能性について議論を行うことができました。現地開催から完全オンライン開催に変更となって、寸時の落胆はあったものの、結果的には講演中を通じて 100 名以上の方に常時ご参加いただきました。基礎と応用の橋渡しという目標にむけて、一定の成果があったものと期待しています。

同大会では、他にも身体活動指針、青年期や労働者の健康づくり、COVID-19、ICT 活用、身体活動支援環境、システマティックレビューなど、多岐にわたるテーマのシンポジウムや演題で運動疫学会員の先生方が講演され、活発な議論がなされておりました。

最後に、企画立案と運営にご支援いただきました原田和弘先生 (神戸大学)、門間陽樹先生 (東北大学)、清野諭先生 (東京都健康長寿医療センター研究所) に深く感謝申し上げます。

会員による海外情報

東京医科大学　根本 裕太

2022 年 9 月からクイーンズランド大学（オーストラリア）の公衆衛生学分野に研究留学しております。コロナ・円安・物価高と、留学するには最悪なタイミングですが、元気にやっております。私が滞在しているブリスベンは、オーストラリアの東海岸に位置する都市です。南半球なので現在は夏ですが、比較的湿度は低いので過ごしやすいです。時差は＋ 1 時間で、zoom や国際電話を活用しながら、日本の仕事も並行して行っています。

私が所属する研究チームは、ALSWH (Australian Longitudinal Study on Women's Health) をはじめ、世界的な大規模コホート研究を主宰する研究室で、約 30 名のスタッフが在籍しております。国際色豊かで、アジア•南米•アフリカからも研究者が集まっています。チームの約 8 割が女性という点も大きな特徴です。教員の多くは研究職で、講義を担当している教員は少数です。また、コホートデータを整理・管理する専門スタッフがいるため、研究者が研究に専念できる環境が整備されています。若手研究者の指導においては、研究指導はもちろん、研究助成の申請に関する指導が徹底されており、若手研究者が自立するための指導体制が確立されていると思います。

現在は、Dr. Gregore Mielke（JPAH の Senior Associate Editor）と、ライフコース疫学の手法を用いて、身体活動の長期的影響について研究しています。2 人でコミュニケーションを取りながら研究を進めるのは非常に楽しく、充実した研究生活を送っております。

余談ですが、市内の道路標識には、目的地までの距離と歩数、10000 steps のロゴが表示されています（写真）。これは、Wendy Brown 教授が実施された地域介入研究の一環で設置されたものです。私も、研究成果が社会実装され地域に残り続ける研究をしていきたいと考えております。

「日本運動疫学会プロジェクト研究」報告

東海大学　松下 宗洋

日本運動疫学会プロジェクト研究認定制度を活用し、私が研究代表者を務めたプロジェクト研究の成果として「身体活動・運動疫学研究における重要論文 20 本（2009 ～ 2018）」が運動疫学研究に掲載されました（24 巻 1 号: 19-33）。私事で恐縮ですが、運動疫学を勉強し始めたときに読んだ“重要文献 20 本（11 巻：17-27）”の更新に関わることができ、嬉しく思います。

本研究がプロジェクト研究の認定を受けることで得られたメリットがたくさんありました。具体的には、1）学会のメーリングリストを用いた会員からの重要文献の募集、2）運動疫学研究への投稿•掲載を通じた情報発信、3)専門家への協力依頼があげられます。これらのメリットは、運動疫学会ホームページ“「日本運動疫学会プロジェクト研究」に認定されるメリットは？”にも記載されている内容です。

これらのメリットの他に、ホームページには書かれていないメリットとして“運動疫学のエキスパートの先生と一緒に論文を書く経験”が得られたことがあります。特に共著者の先生とのディスカッションはとても勉強になりました。このプロジェクト研究を進める上で「重要論文の選定方法はどうしようか？」「ガイドライン等を含めようか？」「研究デザイン重視で選ぶ？トピックも重要かな？」「そもそも 20 本超えても良い？」とか、様々な観点から意見交換がなされました。共著者の先生方は、運動疫学会などで既に交流のある先生でしたが、改めて一つの研究を進めていくことはとても素敵な経験になりました。

運動疫学会で活躍されている先生は、普段から研究の相談に真摯に乗って頂ける方ばかりですが、そんな先生方と一緒に研究する機会としても、プロジェクト研究認定制度を活用して頂ければと思います。

日本運動疫学会の最新情報は公式ホームページを確認してください。公式 HP：http://jaee.umin.jp

- 会員の投稿論文を募集しています。
- 会員の運動疫学研究を支援しています（セミナー、勉強会、プロジェクト研究）。
- 新規会員を随時募集しています。

発行：日本運動疫学会
編集：日本運動疫学会 広報委員会
日本運動疫学会事務局
〒 359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15
早稲田大学スポーツ科学学術院内
E-mail:jaee.info@gmail.com